続・わが闘争

生存圏と領土問題

アドルフ・ヒトラー／平野一郎＝訳

角川文庫

訳者序　七
序言　一三
第一章　生存闘争と平和的経済戦争　一八
第二章　生存圏確保の理由とその方策　二三
第三章　民族の価値と平和主義的民主主義　二四
第四章　ドイツ外交政策の批判と具体的提案　七〇
第五章　国家社会主義ドイツ労働者党の国内・外交政策　八七
第六章　ドイツ統一と領土不足問題　九一
第七章　ビスマルクの外交目標とビスマルク後の外交政策　一〇三
第八章　ドイツの再生と誤てる中立主義　一三七

第九章　ドイツの領土政策の目的　二〇五
第十章　ドイツ外交の基本原則　二二一
第十一章　ドイツの領土政策——東方における生存圏確保　二三三
第十二章　民族価値と政治目標　二三九
第十三章　ドイツとイタリアの利害の共通性　二五九
第十四章　南ティロール問題の本質、ドイツ外交の醜態　二二五
第十五章　イタリアとの同盟　二二三
第十六章　民族の健康な血と肉　二二五
第十七章　ユダヤ人との闘争　二二九
訳注　二二八
あとがき　二八九

とりわけ有効である。自分の後継者を工場労働者として大都市に送り出す必要がなく、自由な農民としてその土地に定着させることのできる民族であれば、ドイツの産業に国内需要地を確保できる。この国内販売地域があればドイツ産業はいわゆる日当たりのいい場所を求めて他の世界で繰り広げられている掴み合いや闘いから次第に手を引き、それから解放されるであろう。

その進展を準備し、いずれそれを実行するのが国家社会主義運動の外交課題である。この運動はその世界観に基づく思想圏からしても外交政策をわが民族の再組織化に役立てなければならない。ここにおいてもまた、闘いは諸システムを求めてではなく、生活している民族のために、肉体と血の保持のために行われるのだという原則が確認されなければならない。そして、身体の健康の結果として、精神的にも健康であり得るために日々のパンが欠けてはならないのだ。

この運動は内政改革闘争においては幾千もの障害と無理解と悪意を踏み越えて進まなければならないように、外交政策においてはマルクシズムによる祖国への意図的な裏切りを、そしてわれわれの国民的、市民的世界の無価値にして有害な観念とスローガンを取り除かなければならない。この運動が採用する闘いの意義に対する理解が一時的に小さければ小さいほど、いずれ得られるその成果はますます巨大である。

第十七章　ユダヤ人との闘争

今日のドイツにとっての同盟国としてイタリアがまず第一に考えられる理由は、この国においてのみ内政と外交政策とが純粋にイタリアの国家利益によって規定されているという事実と結びついている。しかしイタリアの国家利益とは、ドイツの利益とは矛盾しないし、逆にドイツの利益もそれとは背反しないような利益である。

それが重要なのは事実上の理由からだけではない。以下の理由からも重要なのである。

ドイツに対して戦争を行ったのは、その一部の国がドイツ崩壊に直接の利益を有しているような強力な世界連合であった。少なからざる国では、その民族の真に内的なる利害から生じたのではないが幾分かは役に立つかもしれない諸影響のゆえに戦争参加の態度が決定されていた。巨大な戦争プロパガンダが始まり、それらの民族の世論を曇らせてしまい、それらの民族自身には部分的にしても何の獲物ももたらし得ないような、いやそれどころかときにはまさに真の

利益に反しさえするような戦争に熱狂させたのである。

この巨大な戦争プロパガンダをひきおこした力が国際的世界ユダヤ人であった。[1] というのも、これらの国の多くにとって、自国の利益という観点から見れば、戦争参加が無意味であればあるだけ、世界ユダヤ人の利益という観点から考察すると、戦争参加は有意義、かつ論理的に正当でもあった。[2]

ユダヤ人問題自体について論じるのはここでの私の課題ではない。それは、こんなに短く、かつ凝縮せざるを得ない論述の枠内では無理である。ただより深く理解してもらうために、以下の点はここで指摘しておきたい。

ユダヤ人は人種的に完全に統一的ではない核からできあがっている民族である。しかし特別な本質特性を有しており、それが地球上の他の民族とユダヤ人を分かつのである。ユダヤは宗教共同体ではない。ユダヤ人相互の宗教的な結びつきが実際はユダヤ民族のそのときの国家構造である。ユダヤ人は、アーリア人諸国家のような、民族独特の空間的に区切られている国家というものを持っていなかった。にもかかわらずユダヤ人の宗教共同体は実際上の国家である。すなわちそれが、国家のみが任務として果たすことができる、ユダヤ民族の保持と増加と将来を保証しているのである。ユダヤ人国家は、アーリア人諸国家と違って、空間的領土という境界に縛られていない。これは、独自の領土国家を建設し保持する生産力を有していなかったユ

ダヤ民族の本質に起因している。

どの民族も、地上での全行為の基本方向においては、自分自身を保持する願望を活動力としている。ユダヤ人においても同じである。アーリア系諸民族とユダヤ民族は根本的に異なる素質を持っており、それに対応して生存闘争の形式も異なっている。アーリア人の生存闘争の基盤は土地である。アーリア人は土地を耕し、まずは自民族の生産力によって、土地を国内での循環の中で自分たちの要求を満足させる経済の一般的な基盤としている。

ユダヤ民族は独自で生産する能力を欠いているので、空間的に理解されている種類の国家形成を実現できない。自分の生存基盤として他国民の創造的活動と労働を必要とする。それゆえにユダヤ人自身の存在が他民族の生存内での寄生虫的存在となる。すなわちユダヤ人の生存闘争の最終目的は、生産的活動を行っている諸民族を奴隷とするところにある。この目標は実際はいつの時代にあってもユダヤ人の生存闘争に見られたのであるが、それを達成するためにユダヤ人はその本質の集合体全体に見あうあらゆる武器を使用する。

内政においてはユダヤ人は個別民族の内部でまず権利の平等を求めて闘い、それが終わると優越的権利を求める。その際に使用する武器はこの民族の本質に根ざしている狡猾、狡知、擬態、策略、奸計などの諸特性である。その特性は他の民族の軍略にあっては剣の闘いにおいて発揮されるが、ユダヤ人にあっては生存保持闘争の軍略に現れる。

外交においてはユダヤ人は諸民族を不安に陥れ、諸民族をその真なる利益とは別な方向に導き、民族を相戦わせ、そのようにしてカネの力とプロパガンダの助けでゆっくりと支配者に成り上がろうとする。

その最終目標は脱国民化であり、他民族との交雑であり、最高民族の人種水準を低下させるところにある。民族的知識階級を根絶し、人種混淆を導き、自分の民族所属者をもってその知識階級の代わりをつとめさせようとするのである。

ユダヤ人の世界闘争はそれゆえに常に血なまぐさいボルシェヴィズム化で終わるであろう。すなわち内実は、民族と結びついている当該民族独自の精神的指導層の破壊である。それにより、指導者をなくした人間たちの支配者にユダヤ人自身が昇ることができるのである。

その際にユダヤ人の手助けをしているのが怯懦、愚昧、劣悪さである。交雑によってユダヤ人は他の民族体に侵入する第一歩を確実に獲得している。

ユダヤ人支配の最後は常に個別文化の衰退であり、最終的にはユダヤ人自身の狂気である。なぜなら、ユダヤ人は民族の寄生虫であり、彼らの勝利が意味しているのはその犠牲民族の死滅であり、彼ら自身の終焉であるからだ。

古代世界の没落によって若い、部分的にはまったく堕落を知らない、人種的本能を確実に有している民族がユダヤ人と対立するに至った。彼らはユダヤ人の侵入を拒み続けた。ユダヤ人

は外来者であり、全ての虚言も擬態もほとんど千五百年間にわたってその効果をあげなかった。

まず封建支配と領主統治がユダヤ人を、抑圧されている社会層の戦闘に参加させ、瞬く間にこの戦闘をユダヤ人の戦闘に変えさせてしまうような一般的状態を作った。フランス革命によってユダヤ人は市民的平等権を得た。それによって、ユダヤ人が諸民族の内部にあって政治的権力に向かって進める足がかりが出来上がったわけである。

十九世紀が、利息思想に立脚した金貸し資本の拡大によって、ユダヤ人に諸民族の経済内での支配的位置を与えている。株を経由してユダヤ人は最終的には生産現場の大部分を所有するに至り、株式取引所の支援を得て次第に公的な経済的生存の君主にだけではなく、最終的には政治的生存の支配者にまでなるのである。これは、フリーメーソンの支援を得ている諸民族の精神的堕落と、ユダヤ人への依存を強める新聞の働きに支えられている。かつて市民階級が封建支配を破壊する要素であったのに似て、ユダヤ人は、市民的な精神支配を破壊する潜在力を、新興の肉体労働者の第四階級に見出すのである。その際、市民階級の愚鈍、無作法な厚顔さ、貪欲な金銭欲、怯懦、これらがユダヤ人に手を貸している。彼らは肉体労働の階級を特別階級に仕立て上げ、国民的知識階級に対して闘わせるのである。マルクシズムがボルシェヴィズム革命の精神的父親となる。それがテロの武器である。ユダヤ人はその武器を今や情容赦なく冷酷に使用している。

世紀が変わる頃にはヨーロッパにおけるユダヤ人の経済制圧はほぼ完了していた。彼らは今や政治上の保証を求め始める。すなわち、国民的知識階級を根絶しようとする最初の試みは革命の形式で現れている。

ヨーロッパ諸民族の緊張関係は、ほとんどの場合、領土不足の結果として表れているのであるが、ユダヤ人は計画的に世界大戦をけしかけ、この緊張を自分に有利に利用し尽くしているのである。

その目的は、国内では反ユダヤ的であるロシアの破滅であり、行政と軍隊においてなおユダヤ人への抵抗を続けているドイツ帝国の破壊である。さらなる目標は、ユダヤ人への依存、ユダヤ人主導を旨とする民主制が未だ下位に甘んじている王政の転覆である。

これらのユダヤの闘争目標は部分的には少なくとも余すところなく達成された。ツァーリズムとドイツの皇帝制度は打ち倒された。ボルシェヴィズム革命の支援を得て、非人間的な迫害と殺戮によってロシアの上層階級およびロシアの国民的知識階級は殺され、余すところなく根絶された。ロシアでの主導権を求めるユダヤ人の闘争はロシア民族に二千八百万人から三千万人にのぼる死者を強いた。[3] ドイツが世界大戦で支払った犠牲者の十五倍に当たる死者である。[4] 革命が成功した後、ユダヤ人は規律、道徳、風紀などの全体的な繋がりをぶった切り、上位の社会的慣習としての婚姻を破棄し、それに代えて一般的な結合を宣言した。[5] その目標は、規律

を無視した交雑を進めて、自分自身の手で主導権を握るには無能な、それゆえに最終的には唯一の精神的要因としてのユダヤ人を欠いては存続できないような全般的に価値の低い人間混淆を増殖するところにある。

これがどの程度まで成功しているのか、またどの時代にも見られなかったこの非常に恐ろしい人間の犯罪を自然の反応力がどの程度まで変更させることができるのだろうか。この問いの答えは将来が教えてくれるであろう。

ユダヤ人は現在のところ、残った国家に同じ状態をもたらそうとしている。これに関しては、いわゆる国民的愛国同盟という市民的国民的諸政党はユダヤ人のそのような試みと行動を支持し隠蔽しており、他方ではマルクシズム、民主主義、いわゆるキリスト教中央党は攻撃的戦闘部隊としての役割を果たしている。

ユダヤ人の勝利をめぐる激しい闘争は現在ドイツで繰り広げられている。人間性へのこの呪わしい犯罪に対する闘争を一人で引き受けているのが国家社会主義運動である。

今は全ヨーロッパの諸国内で一時的に政治権力を握る闘いが、表面には現れていないが、部分的には静かに、かつ激しく闘われている。

この闘いの結果はまずはロシアやフランス以外では明らかである。フランスでは諸事情からユダヤ人が有利であったし、フランスの国民的国粋主義とは利益共同体を結んでいる。以来、

ユダヤの株式取引所とフランスの軍部とは同盟関係にある。

この戦いはイギリスではまだ決着がついていない。この国ではユダヤの侵入はいつも古きブリテンの伝統と相容れない。アングロサクソンの本能は鋭く活発なので、ユダヤ人の完全勝利はあり得ない。ある部分ユダヤ人はその利益をイギリスの利益に順応させざるを得ない。

イギリスでユダヤ人が勝てば、イギリス人の利益は後退するだろう。その事情は、ドイツの利益によってではなく、ユダヤの利益によって決定されている現在のドイツを見ればよく分かる。それに対してブリテンが勝てば、ドイツに対するイギリスの態度が変わるかもしれない。

ユダヤ人が優位に立とうとする闘いの結果はイタリアにおいても明白である。イタリアにおいてはファシズムの勝利によってイタリア民族が勝ちをおさめた。今日、イタリアではユダヤ人がファシズムに順応しようとするだろうが、イタリア以外の国での対ファシズム方針がファシズムに対するユダヤ人の内的理解を露見させている。ファシズム部隊がローマ進軍を開始したあの記念すべき日以来、イタリアの運命にとってはイタリア独自の国家利益が規準であり、決定的である。[6]

この理由により、今日のイタリアほどドイツの同盟国にふさわしい国はない。われわれのいわゆる民族的諸団体が、今日の時点で国民的に統治されている唯一の国家を拒否し、純粋ドイツ民族派[7]と称しながらユダヤ人と組んで世界同盟に加わろうとしているのは、ただ彼らの底知

れない愚昧さと陰険きわまる卑劣さを示しているだけだ。幸運にも、これらの愚かな連中の時代はドイツで出番を失った。[8] それに伴って、ドイツ民族という概念は卑小で哀れなクズどもと結び付けられて論じられる事態から解放された。これによってこの概念は永遠の勝利を手にするだろう。[9]